



8月24日(木)、25日(金)に、上宮田小の中澤先生と初声中の藪崎先生2名が、横浜大榎橋近くの東京湾水先人会で、社会体験研修をさせていただきました。

これは、2人の先生が、昨年の海洋教育研修会(本研修所主催)で、水先人の方のお話を聞いて、大変興味を持ち、社会体験先として水先人会を希望し、本研究所でコーディネートして実現したものです。

右の写真のような立派な資料を用意していただき、シミュレーションによる水先疑似体験やパイロットボートの乗船体験もさせていただきました。

今回の研修を通して、水先人の仕事の重要性と責任の重さが大変よくわかりました。東京湾水先人会の会長をはじめ、役員、職員の皆さんに大変お世話になりました。改めて感謝申し上げます。



東京湾水先人会における社会体験の報告

上宮田小学校 中澤謙介

水先人って何だろう？

初声中学校の藪崎先生とともに社会体験研修を受けたのですが、2人のためにわざわざ丁寧な資料を作成していただき、水先人という仕事の内容や、現代における課題、制度といった背景を学ぶことができました。

「ぜひ多くの人に『水先人』という職業を伝えてほしい」という話もありましたので、この場をお借りして体験したこと、学んだことを紹介させていただきます。

水先人紹介 導入～もし子どもたちに伝えらしたら～

私たちの身の回りのものを見てみましょう。洋服・食べ物・材料・燃料・・・おそらくその多くが外国から来たものです。それらの99.7%は船で運ばれます。さらにその4分の1は東京湾に集中しているのです。しかし東京湾の地形は入り組んでいて、海底も深さが場所により異なり複雑です。そこに国内外問わず、小型船から300mをゆうに超える大型船まで、毎日600隻以上もの船が出入りしているのです。



このような過密に船が行き来する東京湾。どうして事故が起こらず、当たり前のように毎日航行が行えるのでしょうか。それを支えている1つの仕事は「水先人」なのです。

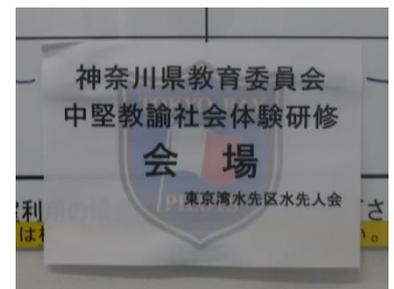
どんな仕事なの？

ある規定の大きさ以上の船は、東京湾に入る際には水先人を乗せることが義務づけられています。その海域に関する様々な海のルールや、入り組んだ地形や潮の流れ等を知り尽くした水先人が乗船することで船の安全性は10倍近く高まります。

水先人は依頼があると、その船に乗り、どう入港するかを指示します。水先人は、日本の港を訪れる外国船が最初に接する日本人であり、その印象で日本そのものを感じ、想像するきっかけとなることから、「無冠の外交官」とも言われている職業であり、常に自信と誇りをもって業務に励んでいます。

どんな技術が必要なの？

まず、その海の地形を知り尽くしていることです。実際に0から海図を作成することが試験にあるほどです。次に英会話。外国の船に乗り込み、その船長と連絡をとるため、英会話は必須です。そして何より操縦技術。様々



な船に乗り込みます。最初に船のシステムをチェックし、その特性を踏まえた上で船を導かなければならないのです。

水先人がいなかったらどうなるの？

大きな船は入ることができません。つまり、輸入に頼る私たちの暮らしは崩壊してしまいます。困ったことに水先人の数は高齢化が進み減っています。また高度な技術が必要なため、すぐに人を増やすことも難しい状況です。ある水先区では、1人しか水先人がいないという場所もあります。そのため水先人に2級、3級という段階をつくり、例えば乗船履歴がない人でも、賃金がもらえる訓練期間を設けて養成していく制度をつくり、水先人が減らないようにしています。

船の操縦ってどんな感じ？

操縦シミュレーターを体験させていただきました。様々な船の設定、潮、風向き、海域など細かく設定でき、現実とほとんど変わらない条件で船を動かすことができます。(分かりやすくいうと「電車でGO!」の船バージョンです) 実際にやってみて感じたことは

①車と違い、摩擦がないからブレーキがきかない！

(大型船の場合、三崎口駅でブレーキをかけても、北久里浜駅まで止まらない)

②舵を切っても、それが反映されるのに時間がかかり、風や潮流の影響も大きく受け、思った方向へ進まない！

③距離感がつかめない！

という中で、たくさんの漁船等とぶつからないように航路をいくことの困難さでした。進路が1度ずれただけでも大きなずれです。外国船に乗り、はじめて会う船長さんの前で安全に気をつけて船を導く。大変なプレッシャーだと感じました。

最後に

「船乗り」というと、「世界中を旅することができる」といった魅力や「何カ月も家を留守にしなければならない」といった不安があるというイメージがあります。しかし、水先人はそうしたイメージとは性格が異なります。「船には乗りたいけど、家を離れるのは・・・」という人には魅力的なものだと思います。ここで書いた他にも、船をつくる上で「なぜ、幅の制限があるのか」「なぜ、199mの大きさの船が多いのか」など1つひとつに理由があり、自分の世界が広がったと感ずることができる研修でした。



岬陽小学校の磯観察

8月5日(火)の午前中、岬陽小学校の3、4年生が、宮川海岸で磯観察を行いました。

大潮ということで、たいへんいい状態の磯でした。子どもたちは大喜びで、カニ、エビ、魚、ウニ、いろいろなものを見つけては、本研究所で配付した防水デジカメで撮影していきます。



同じく研究所で貸し出した裏表観察水槽が威力を発揮しました。子どもたちが捕まえてきた生き物を、水槽に入れると、下の鏡で、生き物の腹側をよく見ることができます。子どもたちも真剣に観察していました。

また、岬陽小学校にも、海洋教育の部屋ができました。水槽や、子どもたちが調べた内容などが展示されています。



海洋教育についてのお問い合わせは、本研究所まで (046-854-9443)